
頑張れ女の子

一宮みや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

頑張れ女の子

【Nコード】

N6384D

【作者名】

一宮みや

【あらすじ】

バレンタインデー。一年に一度だけのこの日。大好きな先輩に思いを告白したい。普段は恥ずかしくて言えないけど、この日だけは言える気がする。だって、バレンタインデーって、その為にある日なんだから・・・。

『学校にチョコレートを持ってきてはいけません』

と、昨日のHRで先生は言っていたけど、それじゃあ、一体、いつ先輩にチョコを渡せば良いと言うの？

サブバックの中に入っている小さな箱の存在を、あたしは布の上から、そつと確かめる。

昨日、お兄ちゃんからの妨害にもめげず、夜中までかかって一生懸命作った先輩へのチョコレートケーキ。

勿論、形はハートで、甘いものが苦手な先輩でも食べられるようにと、スポンジには純正の甘くないココアを使ってあるし、間に挟んだ生チョコには、お酒が好きだって言ってた先輩に喜んで貰えるように、お父さんのブランドーをたっぷりと入れてあるの。しかも、ケーキのコーティングに使ったチョコは、思い切りビターな高い奴なのよ。

それに、ケーキを入れた箱だって、雑誌の特集記事を見て、余計な折り目の一つも付かないように慎重にラッピングして、リボンも先輩の好みそうなシックな奴を選んで、格好良く結んであるの。

もう、そこら辺に売ってるチョコ並、ううん、それ以上に完璧に仕上がってるんだから、あたしのチョコ。我ながら、その出来映えに惚れ惚れするくらいだわ。

先輩だって、これなら受け取って、……食べてくれるわよね？

きゅつと、胸の前で拳を握る。

そつ、後は、これを先輩に受け取って貰うだけ。問題は、……いつ、これを先輩に渡すかってことだけ、なのよ！

あたしの、チョコを渡したい先輩、崇光忍先輩は二年生。あたし達、一年生の一つ下の階にいるの。用事もないのに、そんな所には行けないわ。ううん、用事があっても、やっぱり上級生の階に行くのは、ちよつと気後れしちゃう。

今日は、朝からチャンスがあればいつでも先輩に渡せるようにと思つて、休み時間も教室移動の時も、サブバックを持ってウロウロしてただけど、……先輩には遭えなかった。

本当は昼休みに学食で先輩を見かけたんだけど、いくらなんでも昼休みの学食の中では、あまりに人の目がありすぎて、ちよと勇気が出なかったわ。

そして、今に至つてるつて訳。

やっぱり、渡すのは放課後の部活の時になつちやつた。

先輩は、あたしの入つて美術部の部長なの。一見、無愛想で目つきも鋭くて、怖い印象のある先輩なんだけど、凄く優しい絵を描くのよ。水彩画を主に描いてる人なんだけど、色の使い方が凄く綺麗で、柔らかい印象を与えて、こんな絵を描く人は、きつと優しい人なんだろうなつて思つてしまふ、そんな絵をね。

つまり、見た目の先輩とは、全然違うの。……そこが、また良いんだけどね。

うふふ。

ちよつと照れちゃう。

でも、こんな所のにやけていたら変な人よねと思ひ直して、顔を引き締めて辺りを見回してみる。オツケー、誰にも見られてない。てゆーか、美術室は旧校舎の一階にあつて、そこへ行く渡り廊下は、美術室に用のある人しか通らないんだもの。こんな放課後に、ここを通るのは美術部員だけなのよ。

今日は何人来てるかしら？

あたしのクラスは、今日は帰りのHRが長かったから、きつと先輩はもう部活に行つてゐるわよね。昼休みにあつた時に、今日は部活に行くつて言つていたもの。バイトは、その後で行くみたい。先輩のバイト先には、あたしは行けない。だから、もう、チョコを渡すチャンスは、この一時しかないの。

けど、やっぱり他の人もいたら、ちよつと恥ずかしいな。

どうやつて先輩に渡したらいいのかしら？ 出来れば、そつと誰

にも見つからない時に渡したかったんだけど、もう遅いわよね。
はふ。と溜息を吐く。

美術室までの渡り廊下が、今日はやけに長く感じる。

うつ、頑張れ、あたし。

「愛花。何しているのよ、こんな所で？」

渡り廊下の真ん中で拳を握って自分を叱咤していると、背後から声を掛けられた。

「由希亜？」

同じ美術部の由希亜。あたしの隣のクラスで、やっぱり先輩のことが好きな、あたしのライバル。

「あなたこと、何してるのよ。今日はバイトだって言ってたじゃない！」

由希亜がいたら、先輩にチョコを渡すなんて絶望的だわ。だって、由希亜って、ことごとくあたしと崇光先輩の間に割って入ってくるんだもの。今日は由希亜が部活に来ない日だから、あたし、部活の時に先輩に渡そうって思っていたのに。ヒドいわ。

由希亜は、あたしが先輩のことを好きなのを知っているの。けど、あたしが先輩を好きになったのは去年の12月からだから、入学した当初から先輩のことを好きだった自分の方が、レベルが上だと思ってるのよ。

好きになったら、時間じゃないわよね？

もつとも、あたしと違って由希亜は先輩に対して、実に堂々と『好き』って公言してるから、確かにレベルが違っただけど……。

由希亜の、先輩に対する態度は、あたしには到底真似できないと思うもの。

「何って、先輩にチョコを渡しに来ただけよ。心配しないでも、渡したら帰るわよ」

くすくすと笑って、由希亜は面白そうに、あたしの顔を見る。

あたし、そんなに顔に出てる？

「バイトさえ無かったら、とことん愛花の邪魔をしてやるとこなん

「だけどねー」

何よ、それ。

むうつと膨れてみせると、由希亜は更に面白そうに笑ったわ。

「ねえ、愛花も、まだ崇光先輩に渡してないんでしょ？」

猫みたいに大きな瞳を細めて、あたしの顔を覗き込む。

「……うん」

こくりと頷く。

「ふーん」

あたしがそう言つと、由希亜は、あたしの抱えているサブバックに目を移した。

「ね、愛花のチョコ、どこで買ったの？」

興味津々に覗き込もうとする。

「あたしのは、……手作りだもん」

あたしは、由希亜の視線から逃れるように、サブバックを抱きしめた。

「手作り？ わーお、やるじゃない愛花」

由希亜がビククリした声を上げる。

「あたしはデパートで買ってきた奴だよー」

そう言つと、サブバックの中から綺麗にラッピングされた箱を取り出した。

高そう。

由希亜は、あたしの視線に「先輩も食べられそうなチョコを探してたから、街中歩いちゃったわよ」と唇の端を歪めて笑ってみせた。

「やつぱ、本命チョコを選ぶのは、気合いが入るわよねー」

ふふん。と、勝ち誇ったように胸を反らす。

むう……。

けど、あたしのチョコだって負けてないもん。

「由希亜、何を言ってるの。本命チョコって言つのは、手作りチョコのことなのよ」

決めつけてやる。

「心を込めて、自分で作ってこそ、本命チョコなのよ。愛が籠もってるの。買ったものじゃ、そうはいかないわねえ」

「甘いわね、愛花」

あたしの台詞に、一瞬唇を噛みしめた由希亜が、ふんと鼻を鳴らした。

「本命チョコは、手作りチョコって言うけど、あなたの家には、確か、お兄ちゃんがいなかった？」

「え？……いる、けど？」

由希亜が何を言いたいのかわからない。

「お父さんもいるわよね。てことは、あなたの作った手作りチョコ、残りはどうしたの？」

うつ……。

どことなく、由希亜の言わんとすることが分かったような気がした。

「あなたの先輩への本命チョコ、あなたの愛が籠もったチョコは、先輩だけのチョコでは無くて、お父さんとお兄ちゃんにもあげたものなんじゃないの？！」

どどーん！

あたしに向かって指を突き付ける。

そっその通りだね。確かに先輩への本命チョコを作った残りで、お父さんへのチョコも作ったわ。お兄ちゃんへは、分量が足りなくて溶かしたチョコがこびり付いた鍋とかやっただけだけだ。

「ほっほっほっほ！つまり、あなたの先輩への思い、先輩に対する愛情は、恋愛感情ではなく家族への愛情と同じってことよね」

わざとらしく高笑いをしてみせる由希亜の前に、あたしは敗北の二文字を見た気がした。

けど

「ちょっと、待ってよ。それなら買ってきたチョコだって同じじゃない。店で売ってる奴は、それこそ、誰の為にもある奴なんだから」
「うつ、気が付いたか」

由希亜が臍を噛んだ。

「まあ、買ってきたチョコでも、自分で作ったチョコでも、渡す時に愛が籠もってりやいいのよ、ね」

うんうんと瞑目して頷いてみせる。

もう、なによ、それ。自分が言い出したくせに。

「やつぱり、究極のチョコは、自分チョコな訳だしね」

「はあ？」

また、訳の分かんないことを。

「だから、自分の体にチョコを塗りたくって、『あたしをア・ゲル』って、先輩に食べてもらうのよおゝ ああん、うっとり」

……。

いや、うっとりって。自分チョコって言うのは、誰にもやらないで、自分の為に買う自分のコレートの事じゃなかったっけ？

「由希亜、自分チョコって、そーゆー意味じゃないと思うわよ」

前頭葉が異様に痛いわよ、それ。

「そう？」

由希亜は本気なのか冗談なのか分からない満面の笑みで、「でも、絶対、先輩は喜んで受け取ってくれると思わない？」と拳を握る。

うーん……。それは、そう……。かも知れないけど、その『自分チョコ』をあげる為には、大前提として、……先輩の前で、裸になつてなきゃいけないのよね？

「あたしは、もつと普通の方法で渡したいかなあ」

思わず想像して、顔が火照ってしまふ。

「そう？ あたしは、自分チョコを渡せるもんなら渡したいけどなあ」

まあ、由希亜なら、いつかやりそうで、怖いわよね。

「兎に角、先輩に渡す時に、どれだけ愛を込められるかってところが勝負の決め手よね。てことで……」

由希亜は、にやっと笑うと、突然ダッシュした。

「先輩にチョコを渡すのは、あたしが最初よ！」

「あつ?!」とか思った時には、美術室の扉を開けている。観音開きの扉が思い切りよく開いて、けたたましい音を響かせた。

「崇光せんぱあゝい」

そのままの勢いで部屋の中に駆け込んで行くと、由希亜はカンバスに向かつて座っている先輩の背中に、ジャンプしてしがみついた。「うるさいぞ、由希亜」

静かな声。

背後からいきなり抱きつかれた先輩は、絵筆を持ったままの姿勢で止まっている。既に由希亜の行動には慣れっこな他のみんなも、一瞬顔を上げただけで知らん顔しているわ。

「先輩。はい、これ。あたしの気持ちです」

由希亜は、先輩の冷やかな声にも全く動じず、首っ玉にしがみついたままで先輩にチョコを押しつけた。

「いらん」

思い切り冷たい声。あたしだったら、言われた途端、ショックで悲しくなっちゃうだろう声。

でも、由希亜は、「もう、先輩ったら、照れ屋さん」なんて言っ
て、つんと、先輩の頬を指先で突っついたりするの。

由希亜って、本当に凄いと思うわ。

「いいから、離れる、由希亜」

「チョコを貰ってくれるなら、離れて、あ・げ・る」

ぴとつと、更に先輩の頬に自分の頬を寄せるようにしてくっつく。先輩が天を仰いだ。カンバスの陰で、西条先輩が笑いを噛み殺しているのが見えるわ。

「分かったから。ほら、由希亜。貰っておくから、離れる」

先輩は絵筆を置くと、由希亜の手からチョコを受け取った。由希亜は、満面の笑みで、もう一度ぎゅっと抱きつくと、先輩から離れた。

「良かった。大事に食べて下さいね。あたしだと思って」
にっこりと笑う。

「……お前だと思ったら、胸焼けを起こしそудな」

「どーゆー意味ですか」

何を言われても、にこにことしている。強いなあ、由希亜。

「じゃ、そーゆーことで。あたし、今日はバイトなんで、これで帰りますね」

由希亜が、くると背を向ける。先輩は、その途端、手にしたチヨコを西条先輩に向かって「やるぞ」とか言って投げようとして、振り返った由希亜に見咎められた。

「先輩！何してるんですか？」

思い切り怒られる。

「いや、別に」

口籠もる先輩が可愛い。

「西条先輩も、受け取っちゃ駄目ですよ。いいですか！絶対、先輩が一人で食べて下さいね！あたしの、愛が籠もってるんですから」
畳み掛けるようにして、西条先輩と崇光先輩とを交互に睨み付ける。

「分かったよ、由希亜」

「由希亜ちゃんの忍への愛を横から取ったりはしないよ。誓ってね」
二人とも宣誓するように手を挙げています。それとも、降参のポーズなのかしら。

「あやめ先輩、見張って下さいね」

辺りの騒動を、につこり笑った顔で傍観していた、あやめ先輩に向かつて、由希亜は手を合わせた。あやめ先輩は「はいはい」と、由希亜の言葉に頷いて見せる。

あやめ先輩は、いつでもにこやかな顔してて、頼りになる女子の味方なの。あたしが崇光先輩のことを好きなことも知っていて、さりげなく由希亜を先輩から遠ざけてくれたりするのよ。

だからと言って、別に、あたしの味方をしてくれる訳じゃあないんだけどね。先輩は単に面白がっているだけなの。あくまでも、傍観者としてね。

「それじゃあ、ホントに、お先に失礼します」

由希亜は、そう言うとは度も後ろを振り返りながら先輩を牽制しつつ、美術室から出て行った。しかも、最後の最後、入り口の所であたしの方を見て「お先に、愛花」と言つて、にやりと笑つてね。

うつうつ、負けないもん！

あたしがイーゼルを置く位置は、先輩からちよつと離れているの。間には西条先輩と、今日は来ていないけれど、彰君とか他の部員が2名いて、実は描いている途中に顔を上げると、先輩の顔がよく見える絶好のポジションだったりするんだけど……、チョコを渡すには、遠すぎる。せめて隣だったら、先輩のバックの中に、こっそりと入れておくなんてことも可能だったかもしれないのに。

「やれやれ」

由希亜颱風が去った後、先輩は肩を落としてポケットから煙草を取り出した。小さな箱を指先で弾いて、一本飛び出してきた奴をくわえると、黒い細身のライターで火を点ける。

「由希亜にも困ったもんだな」

深く吸い込んで、溜息と共に、細く長く、煙を吐き出す。

「モテモテじゃねーか、忍」

西条先輩が、にやにやと笑つてる。

「由希亜から貰つても、有難味がねえんだよな。食うか？」

「まあ、あれだけいつも、お前のことを好きだと連呼してたら、新鮮さには欠けるよな」

崇光先輩の差し出すチョコに、いらないと手振りで言つて、西条先輩は、うーんと伸びをした。

「なかなか立派なチョコじゃないの。由希亜の気持ちちが籠もってるんだから、ちゃんと食べてあげないと、罰が当たるわよ、忍」

あやめ先輩もくすくす笑つて、受け取りを拒否した。

「お前ら、面白がつてるだろ」

苦虫を噛みつぶしたような声でそう言つと、先輩はワゴンの上の携帯灰皿に煙草を押しつける。

「どうやったら、これが面白がらずにいられるか、教えて貰いたいね」

「由希亜は可愛いわよねえ。ホントに」

二人とも、完全に楽しんでいる。確かに、由希亜の先輩に対する行動は、端から見ていたら爽快感さえある程大胆で、一種の見せ物だとは思っただけど……。

でも、由希亜はあれで大真面目なのよ。彼女は、あれでも本気で先輩のことを好きなんだもの。4月に入学して、それ以来、ずっと崇光先輩一筋で追いかけてきてるんだから。どんなに先輩に邪険にされても、冷たい言葉を吐かれてもね。

彼女の行動は、神経が太いとか、そーゆー言葉で片づけてはいけない気さえするわ。

本当に、由希亜って強いだよ。

あたしとは、大違い。

「愛花」

先輩があたしの名を呼んだ。

「はっはい！」

思考の淵に沈み込んでいたあたしは、思わずドツキリして顔を上げる。

「お前、チヨコ好きか？」

いきなり名前を呼ばれて、ドキドキして返事をしたのに。よりもよって、先輩は、あたしに由希亜のチヨコをくれようとするの。

もう、そんなの絶対、駄目！

「要りません！てゆーか、バレンタインのチヨコには女の子の気持ちちが籠もってるんだから、それは先輩が食べなきゃ、駄目です！」
いくら由希亜のでもね。

先輩は、あたしの剣幕に、一瞬「おおっ」とたじろいで、溜息を吐いた。そして、「俺、羽生のもあるんだけどなあ」と、爆弾発言をしたわ。

「何？ やっぱ彰の奴、お前にチヨコやったのか？」

西条先輩が大笑いをしている。

「男からもモテるとは、流石だね」

「頼むから、冗談で済ませてもらいたいんだが……」

頭を抱えて見せる先輩。けど、彰君も由希亜と一緒に、先輩のことを好きだって事は、既にみんなが知ってる。彼も、彼なんか、特に男なのに、誰の前であつても全然「先輩が好き」って態度が変わらないの。凄いと思うわ。

……あたしとは、大違い。

あたしは未だ、先輩に「好き」と伝えることも出来ていないんだもの。知っているのは、由希亜と、同じクラスの親友と、あやめ先輩だけ。

ちらりと、隣のあやめ先輩を見ると、あやめ先輩もあたしを見たわ。ううん、正確には、あたしの足下に置いてあるサブバックの中を。

あたしも、つられてバックの中に目をやると、ラッピングされたチョコケーキの箱が丸見えだった。

ハッとしたあたしに、あやめ先輩は「あらら」とゆる顔をして、崇光先輩を一瞬見て、あたしに視線を戻したの。そして「まだ渡して無かったの？」と、小さな声で囁いたわ。

あたしはその言葉に、こくと頷く。

あやめ先輩は「なる程」と二三度頷いて見せ、「西条が邪魔ね」と不敵に笑ったの。

えっと……。なんか怖いんですけど、その笑み。

「西条」

あやめ先輩が、思いついたように声を上げた。

「何？」

「私、今日画材店に行こうと思うの。一緒に行ってくれない」

「俺？」

西条先輩が眉をひそめる。あやめ先輩から誘われることなんか無いからだと思う。あやめ先輩は、大抵、崇光先輩と一緒に行動して

るんだもの。

「忍は、今日バイトなんでしょう？ 私、もう帰らなくてはいけないの。と言うことで、西条、早速行くわよ」

そう言つと、西条先輩の返事も聞かずに立ち上がり、さっさと帰り支度を始める。

「あ、おい、白眉」

西条先輩の分まで片づけ始める、あやめ先輩に、西条先輩も帰り支度を始めるしかなくって、そんな二人をハラハラしながら見ていたら、あやめ先輩があたしを見て、とっても可愛くウインクをして見せた。

うつつ、恩に着ます、あやめ先輩。

あたしはカンバスの陰で、思わず手を合わせてしまったわ。

「ほら、早くなさい」

あやめ先輩は、もう西条先輩の鞆まで持つて、扉の所で待つている。

「それじゃあ、忍、愛花、二人とも、お先にね」

「おい、白眉、待てよ。何急いでんだ、お前？ ……じゃあな、忍、白石」

ボタンと扉が開いて、そそくさと出て行くあやめ先輩と、それを追いかけるようにして出て行く西条先輩。そして、ゆっくりと扉が締まった。

締まった途端、この広い美術室の中に、先輩と二人つきりになる。

「あやめの奴、どーしたんだ？」

崇光先輩が窓の外、渡り廊下の方を見ながら、首を傾げた。

まあ、確かにいきなりな行動だったけど、真相は、あたしとあやめ先輩にしか分からないわよね。

あやめ先輩の行為を、無にしちゃいけないわ。

こくりと、口の中に溜まった唾を飲み込む。

静かな部屋の中に、絵筆が滑る音だけがしている。先輩は、黙々とカンバスに向かって色を塗っていて、あたし一人、……凄くドキ

ドキしてる。

旧校舎の一階にある美術室は、運動場の喧騒も聞こえてこない。ただ静かに、集中して絵が描ける場所なんだけど、そんな中にいるのに、あたしは、今日は全然、絵に集中なんか出来なかった。

「お前、今日は遅くまで残ってるんだな」

どれくらいの時間が経っただろう。先輩が、うーんと伸びをして傍らのワゴンの上から煙草を取り上げた。

いきなり話しかけられて、ドキッと心臓が跳ねたわ。

結局、二人つきりだって言うのに、あたしは先輩に話しかけることも出来ずにいて、ただカンバスに向かっているだけだったの。

絵を描いていた訳でも無いのよ。だって、全然絵を描く気持ちになれなかったんだもの。自分が何を描いているのかさえよく分かって無くて、今日描いた所は、絶対、明日見たら描き直しだわって思うの。

あやめ先輩、ごめんなさい。先輩の行為、無にしちゃいました。はあ。

心の中で、あやめ先輩に懺悔しつつ、大きく溜息を吐き出す。

「頑張ってたんだな」

先輩は何を勘違いしたのか、「偉いぞ」と言って、くわえた煙草に火を点けた。一息吸って、くわえたままで紫煙を一筋、細く吐き出す。

一瞬、泣きそうになったわ。

先輩にチヨコを渡したいから、こんな時間になっちゃったのに。そんなことも分らないの、先輩？

「愛花、どうした？」

「なんでも、ないです」

ぷいとそっぽを向いてみる。

「ん？」

先輩は何か言いかけて、壁に掛かった時計を見上げて、「もう帰るか？」と言ったわ。

窓の外は、もうすっかり日が落ちている。確かに、もう帰らないといけない時間よね。

けど、ここでチヨコを渡さなかったら、あたし、馬鹿じゃないかと思うの。昨日、お兄ちゃんの妨害にもめげずに、一生懸命作ったチヨコが無駄になっちゃうのよ。あやめ先輩の行為も、無駄になっちゃうのよ。

そんなの嫌。

「あ、……あの、先輩」

あたしは、ありったけの勇気を振り絞ってみたわ。

「ん？」

先輩は、くわえ煙草のまま、あたしを見て、あたしは何か言おうとして、……でも、なんて言えばいいのか考えもなしに声を掛けてしまったことに気付いて、

ああ、あたしって馬鹿！

「あつ、あの……、あの、先輩……。あたし、あの……一緒に、帰っていいですか？」

……。

一瞬の間があつた。

あああん、もう、そんな事じゃなくて、もっと他に言うことあるでしょう、あたし。なんて言えないのかしら？　なんで、こう、すらつと出てこないのかしら？

あたしの心臓の音、凄く激しくて、もしかしたら先輩にも聞こえてるんじゃないかって思うのに、肝心の台詞は、相手に伝えられないの。

先輩は微かに頷いて、「いいよ。もう暗いからな」と言ったわ。

女の子の夜道の一人歩きは危ないからって意味だと思う。先輩は優しいから、女の子には、特に優しいから……。

美術室の片づけをして、戸締まりをして、昇降口で待ち合わせて、一緒に帰る。

ちよつとだけ幸せ。でも、本当は

サブバックの中の箱を、先輩に渡したい。あたしの思いを、受け取って貰いたい。

「夜は冷えるな」

吐く息が白い。

昼間はだいぶ暖かいけど、日が暮れると、まだ肌寒いわ。日の入りもだいぶ長くなってきたけど、もう、この時間じゃ、辺りは真っ暗。街灯無しじゃ、ちよつと怖い。

隣を歩く先輩の横顔を見る。

あたしよりも背が高くて、見上げなきゃいけないから、ただ横を向いただけだと先輩の胸の辺りしか見えない。内ポケットには、煙草が入ってるのよね。側にいると、ちよつと煙草臭い。最初、美術室で先輩が絵を描きながら煙草吸ってるの見た時はビックリしたけど、実に自然に吸ってたから、他の人も何も言わなかったから、そのうちあんまり気にならなくなったの。いわゆる、馴れっ奴？

別に悪ぶってるとか、不良とかじゃないのよ。先輩は自然体って言うのかしら、自分のルールで生きてるって気がする。確かに校則には違反してるから、良くないことなんだろうけど、それでも、あたしは先輩のことが好き。

いつから好きかって言うのは、よく分からないけど、先輩のことが気になりだしたのは、ハッキリしているわ。

去年の12月。

買い物に行った帰り、電車に乗り遅れちゃうと思って、繁華街の裏通りを近道していたら、危ない感じの人達に絡まれたことがあったの。その時に助けてくれたのが、先輩。バイトに向かう途中だったみたいで、本当に偶然通りかかったただけなんだけど、助けてくれた先輩は、凄く、格好良かったの。

由希亜にそれを言っていると、それはあたしの『勘違い』なんだと言っただけだね。

あたしは『先輩』を好きなんじゃなくて、その怖かったと言う状況下で助けてくれた『相手』だから、先輩に引かれているだけだった。

て。怖かったドキドキ感を、助けてくれた相手に対するドキドキ感にすり替えてるだけなんだって。

そんな事無いって思う。だって、本当に、その時は先輩って格好いいって純粹に思ったけど、好きになったのは、それからずっと先輩を見てきた後だもの。ずっと見てきて、いつの間にか、好きになっ
ていたんだもの。

「先輩」

そつと呟く。

「あの、あたしを助けてくれた時のこと、……覚えてますか？」

小さな声だったから、聞こえてないかも知れない。そう思ったけど、先輩にはしっかり聞こえていて、「お前がアホな奴らに絡まれてた時のことか？」と言ったわ。

「……お前、まだあんなトコを近道とかしてんじゃないだろうな？」

しかも怒られた。

「もうしてません。ちゃんと表通りを通ってます」

ぷつと膨れる。

会話が續かない。

あああ、沈黙が痛いわ。

「先輩……もし、……もしも、あたしが、また誰かに絡まれていたら、助けてくれます？」

「……俺が通りかかればな」

絞り出した台詞も、馬鹿みたい。こんなこと言っつもりもないのに。

「いつでもどこでも、お前のピンチを察して飛んでいく、なんて真似は出来ないぜ」

「そー、ですよね」

自戒の念に苛まれるわ。

「……何考えてるんだ？」

先輩の声も怪訝そう。

「すみません」

もう、本当に、何を考えてるんだろう、あたし。自分で自分の馬鹿さ加減を呪いたいわ。折角、先輩と二人つきりなのに、こんな会話しか出来ないし、……しかも、もう駅に着いちゃうじゃない？

角を曲がると踏切を越えて、高架を抜けたら駅はもうすぐ。もう、向こうの方に一際賑やかに明るく駅前が見えてる。あんな所まで行ったら、もう絶対、チヨコを渡すことなんて出来ないわよ、あたし！
「愛花？」

いきなり立ち止まったあたしを、一二歩進んだ先輩が振り返った。人通りはあるけど、車通りもあるけど、幸い、それほど多くはなくて、少なくとも、学生の姿はどこにも無い。勿論、あたしには見えないだけで、あたしの後ろには実は大勢の学生がひしめき合っているのかもしれないけど、……でも、でももう、あたし、ココで言わなきゃ、どーするの？！って感じよね。

「あの、先輩！」

サブバックの中に手を入れる。昨日一生懸命心を込めて作った箱が、指に触れる。

「あたし、あの、先輩に……」

慌てちゃって、巧く取り出せない。

「あたし、あの、あれ？先輩に……、あの、これ……」

引っ張り出したチヨコケーキの箱、こう暗かったら、何が何だか分からないわよね。あれだけ一生懸命、包装紙とかリボンとか選んだのに。

「これ、受け取って下さい！」

勢い込んでしまった。心臓が口から飛び出しそうに脈打ってる。

ちよっと、差し出す手が震えちゃってるわよ、あたし。それなのに

この長い、長い沈黙は、どーして？

先輩は、固まったみたいに動かなくって、あたしの差し出す箱を受け取ってくれなくて。

「えっと、愛花」

先輩、困惑してるの？

突然だったから、当然の反応だとは思っけど、お願い、受け取って下さい！

「……お前、マジか？」

なんだか先輩の反応がおかしいわ。

「本気ですよ！」

思わずムキになってしまう。

「なんで、そんな事言うんですか?!」

ここまでドキドキしてチヨコを差し出したのに、その反応は無いでしょう？ちよつとあんまりだと思っわ。

先輩は、あたしの剣幕にちよつとたじろいで、「いや、だって、お前いつも由希亜と一緒にいるから」と言ったの。

聞いた瞬間、目の前が、くらつとしたわ。

それはつまり、由希亜の陰に隠れて、あたしの存在ってものは眼中にさえなかったって事よね？

「由希亜は、関係ありません！あたしは、あたしとして先輩のこと……」

前半の台詞は勢いが良かったのに、後半の台詞は、かーっと照れちゃって、思わず口籠もっちゃった。

「愛花……」

でも、先輩は分かってくれたみたい。当惑した顔は相変わらずだけど、微かに微笑んだ。

「もしかして、それを渡したかったから、今日残ってたのか？」

こくりと頷く。

「馬鹿だな」

馬鹿って言われた。

ええ、どーせ馬鹿ですよ。由希亜みたいにジャンプして先輩の首っ玉にしがみついて、チヨコを押しつけるなんて真似出来ませんよ。それでも、それでも、あたしだって由希亜に負けにくいくらい、先輩のこと『好き』。

「由希亜も、知ってるのか？ お前のこと」

もう一度、こくりと頷く。

先輩は「なる程」とか呟いて、「喧嘩になったりとかしない訳？」と素朴な疑問を口にしたわ。

「由希亜は、先輩が誰のことを好きだろうと、先輩が好きなんですよ。だから、他の誰が先輩のことを好きになつたとしても、彼女の気持ちは変わらないんです。だから、大丈夫です」

説明してしまう。ライバルなのに、由希亜の気持ちは、どこなく分かるから。あたしも、他の誰が先輩のことを好きでも、先輩の事が好きだもの。

「そっかー、由希亜のは、マジなのか。やっぱり」

思わず考え込む先輩。もしかして、由希亜の猛烈アタックは、全然先輩には伝わっていなかったってことなのかしら？

そう思うと、由希亜って可哀相かも……。

「で、お前が俺をつてーのは、やっぱアレか？ あの時、俺がお前を助けたからか？」

見下ろされる視線が痛い。

あたしは、三度、こくりと頷いた。先輩も微かに頷くと、人差し指を立てて諭すようにして、「お前のそれは『勘違い』なんじゃあ……」と言いかけたわ。

「先輩、由希亜と同じ事を言ってますよ」

先輩の台詞を途中で制するのは気が引けるけど、先輩がそんな事を言うなんて頭に来ちゃう。あたし自身が、そんな事は無いって分かってるのに。

「うわ？！ 俺、由希亜とレベルが一緒かよ……」

あたしの台詞に頭を抱えて呻いてる先輩が可愛いから許すけど、今度そんなことを言ったら、絶対、あたし泣いちゃうから。

「先輩。これ、受け取って下さい」

あたしは、今度は落ち着いて、ハッキリとそう言えたわ。

先輩は頭を抱えたまま、あたしを見て、しばらく何か考えていて、

でも、やっと受け取ってくれたの。

手渡す時、やっぱりちよつとドキドキしちゃった。

先輩は片手で箱の重さを確かめるみたいに微かに振って、「重いな」とか呟いたの。

「中身、何？ って、チョコレートか。美味しいのか？」

自分の台詞にセルフツツコミして、あたしの顔を覗き込む。

「それは、あたしの手作りだから……美味しいかどうかの保証はありません」

先輩の目が怖いわ。別に睨まれてるとかじゃないのに、どっちかっというところからかわれてるに近いのに、そんな目で覗き込まれると、ドキドキして震えそうになるほど、怖い。

なんでそんな目をして、あたしを見るんですか？

もう、恥ずかしい。

「手作り？ これ、愛花が作ったのか？」

手の中の箱を目の高さまで持ち上げて、まじまじと見つめてる。

「そうです」

なんか照れちゃうわよ、その反応。

「そっかー」

先輩は感慨深げに頷いて、「それじゃあ、これは俺が食べなきゃなあ」って言ったの。

えっ？ とゆーことは。

「先輩、由希亜のとか彰君のとかは、……食べないんですか？」

「うん。バイト先の店で客に出そうかと思って」

あっさりと言うし。

「俺、甘いもの駄目だから。貰ったチョコは、いっつもバイト先で出してんだよな」

極悪非道のことを、平気で言う。

ヒドイ、ヒドイわよ、それ。女の子の気持ち、まるっきり無視してる。

「最低ですね、先輩」

うつ、自分で作ってて良かった。てか、自分で作ろうと思って良かった。

思わず、お祈りしちゃう。

「そっかー？」

先輩はチョコの箱をバツクに仕舞うと、歩き出した。

「俺、普段からチョコは食わないって言ってんだぜ。それなのに俺にチョコをくれるってのは、悪意さえ感じるぜ。喧嘩売ってると思われないだけ良いと思って貰わないと」

何ですか、その言い方？

「そんなこと無いです！あたし、そんなつもりじゃないですからね！」

小走りに追いつくと、並んで歩きながら先輩を見上げる。

「今日はバレンタインディなんですよ、先輩。女の子が好きな男の子にチョコを渡す日なんです。だから、みんなチョコを渡してるんですよ。先輩がチョコが苦手なのは知ってます。それでも、普段気持ちは伝えられない女の子は、今日と言う日を、チョコを利用するしかないんですよ。今日のチョコは、普段のチョコとは全然意味が違うんですから。……それなのに、受け取っても食べてあげないなんて、ヒドイです！」

「力説するなあ、愛花」

歩きながら、先輩が苦笑してる。

だって、だって、あたし……。

「お前が俺に喧嘩を売ってるとは思ってないよ、愛花」

見上げるあたしを見下ろして、にやりと笑う。

その顔を見ると、なんだか、急に自分でも恥ずかしくなっちゃった。

何をムキになってるのかしら、あたし？

火照った頬を両の手で包むと、もう何を言っているのか分からなくって、前を向いて黙々と歩いてしまう。

そんなことをしてたら、程なくして駅に着いたの。

あたしが乗る電車は、まだ来ないみたい。でも、先輩が乗る電車
は、もうすぐ来るんだって。ホームに出ると、電車が入ってくると
アナウンスがあった。

先輩は、もう何も言わない。人の目があるからかしら、あたしの
事も、見てくれない。

でも、あたしは、もうちょっと先輩と話していたいと思って、声
をかけたの。

「あの、先輩！」

「ん？」

先輩は、ゆつくりとあたしを見たわ。小首を傾げるようにして、
あたしのことを見下ろすの。長めの前髪が、顔に影を落としている。
無口で無愛想で、格好良い人って言われるよか、怖い人って言われ
ることの方が多い先輩なんだけど、こうした何気ない雰囲気は、凄
く柔らかい。

先輩の描く絵みたい。

「あっあの……」

あたしは、また少し口籠もっちゃって、でも、これだけは言いた
くって、

「今日は、あの、チョコ……貰ってくれて、ありがとうございまし
た」

ぺこり。

お辞儀をしちゃった。

……。

先輩は一瞬、少し垂れ気味の切れ長の目を細めて、くすつと微か
に笑ったわ。

そして、あたしに向かって手を伸ばしたの。

あたしは身動き出来ずに立っていて、先輩の手があたしの頭に触
れる時、ちよつと体に緊張が走っちゃった。

けど、先輩は、ポンポンって軽くあたしの頭を叩いたの。すつこ
く優しい感じにね。

美術室の裏に居ついてる野良にゃんこの頭を撫でてやる時みたいな感じに、凄く暖かくて、大きな手で。

体の緊張が一気に解れて、先輩の手から温もりが伝わってきて、あたしの中が、幸せに満たされていく気がしたわ。

ぽーっとなったあたしに、先輩は、「返事は、一ヶ月後な」って言っただの。

一ヶ月後？……ホワイトデイ。

「期待すんなよ」

そう言って手を離れたけど、……駄目。そんなこと言われても、絶対、駄目よ。

あたしも、期待なんかしちゃいけないって、そう思っけど、でも、もう絶対、あたし先輩のこと……、好きだもん！

「します！」

電車が入って来たわ。ホームに滑り込む電車の音に負けじと、あたしの声も、知らず大きくなってしまっ。

「あたし、期待して待ってます！」

こんな優しい顔してくれる先輩、他の誰にも渡したくないもの。プシューー。

圧搾空気の音がして、扉が開いた。

「だって、あたし……あたし、先輩のこと、好きですから！」

言っちゃった。

言っただ途端、かーっと耳まで赤くなったのが分かったわ。

こんな、駅のホームで言うことじゃないわよね。電車の中から吐き出される人達と、乗り込んでいく人達。周囲にいた人達が、一瞬あたしの方を見たのが分かったわ。

うちの学校の人はいないみたいだけど、それでも、恥ずかしい。今まで部活で二人つきりていたのに、どーしてこんな所で言わなきゃいけないの？

我ながらタイミングってものを外しすぎだと思う。

それは分かっただけ、でも、言っちゃったものはどうしようも

無いわよね。

先輩は、ちょっと困ったような顔してて、……ああ?!この電車に乗るつもりだったのよね、先輩は?

「ごっ、ごめんなさい、先輩!あたし、あのっ!」

悪かったとは思うわ。でも、あたし、言っちゃいました!

慌てふためくあたしに、先輩は苦笑していて、「女の子は、強いなあ」って、呟いたの。

その声の色に、少しだけホッとする。

でも、ううん。全然、あたしなんか、全然強くない。

それでも、伝えなきゃって思うから……。

だから、言うの。

今日はバレンタインディなんだもん。女の子が、ありったけの勇気を出して、普段言えない台詞を言って良い日なんだもん。利用しない手は無いわ。

きっかけとか無くって、自分でチャンスを作ることも出来なくて、ただ遠くから見つめることしか出来ない臆病な女の子が、今日だけは堂々と自分の気持ちを相手に伝えることが出来る日。ありったけの思いを、チョコに込めて、告白できる日。

今日がチョコレート会社の策略で生まれた日だって、なんだっていいの。あたしみたいな、普段、相手に気持ちを伝えることが出来ない女の子には、どれだけこの日が有り難いか知れないんだから。

『好き』

たった一言なのに、口に出すのに凄く勇気のある言葉。目の前にいる相手に伝える為に、どれだけの精神力がいるのか分からないくらい、ドキドキしてしまう言葉。

伝えたくても伝えられなくて、何度溜息を吐いたか分からなくて、何度泣きそうになったか分からなくて、でも、伝えなきゃ何も始まらない言葉だから……。

だから、言うの。

今日はバレンタインディなんだもん。あたし達、臆病な女の子の

後押しをしてくれる日なんだもん。少しだけ、勇気を貸してくれる日なんだもん。

だから、今日だけは、あたし、言えるの。

「あたし、……先輩のこと、好きです」

【FIN】

（後書き）

以前、バレンタインディなんか知らない派の友人（ ）と喋っていた時の会話が元になっております。

彼は今も元気にチョコを貰えないこの日を過ごしているのでしょうか？・・・（遠い目）。

え？私ですか？・・・私は、勿論バレンタインディは、いる派です。チョコは嫌いなくせに、こーゆー甘甘イベントは好きなんです（笑）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6384d/>

頑張れ女の子

2010年10月8日15時44分発行